

佳作

ローランド先生の大きな手

茨城県 下妻市立上妻小学校六年 植木 美葉

今年の夏休みに、私はローランド先生という素晴らしいピアニストに出会いました。

先生は、ウィーンに住むオーストリア人です。今回、ソロのコンサートと、私も出演したコンサート、エルトフェスティバルのゲストとして来日しました。

そして、幸福なことに、私は先生の公開レッスンを受けることとなりました。著名な外国人ピアニストのレッスンどころか、日本人の先生の公開レッスンさえ受けたことのない私は、数日前から緊張していました。当日まで、私はこの緊張を解くため、一生懸命に練習しました。夏休み中で、かなり練習時間が取れました。そして、オーストリア人の先生のためにドイツ語のあいさつも覚えしました。

当日、先生は笑顔で私の前に現れ、

「Good morning!」

と、英語であいさつをしてくれました。ドイツ語のあいさつを考えていた私は、少し拍子抜けしましたが、英語であいさつを返し、握手をしてもらいました。その手はまるでグローブのような大きな、厚い、温かい手でした。細くしなやかな指を想像していた私は、先生の手におどろきました。しかし、これにより、私の緊張は少し和らいできました。

レッスンが始まりました。気持ちが高まりました。来た私は、これまでに弾いたことのないような高価なピアノの前に、気持ち良く、ピアノを弾くことができました。先生のコメントは、通訳の人を通して私に説明がありました。先生が私の演奏をほめてくれることは、所々の単語と先生の笑顔で、通訳より先に伝わってきました。レッスン中、先生は、色々な表現で私をほめてくれました。また、

先生の弾くピアノの音は、あのグローブのような手からは想像できない、せん細で軽やかなものでした。二つのけんばんを同時に弾いてしまいそうな太い指から、どうしてあんな音が出せるのか、私は、その手を見つめていました。上半身の表現も素晴らしく、比かくすると、私のはまるで気をつけをしているようでした。先生のテクニクを少しでも多く吸収しようと、必死に演奏を見つめ、通訳の話を聞いていると、四十五分間のレッスンはあっという間に終わりました。

その日の夜の先生のコンサートも、クラシックとジャズの共演という私にとっては初めてのものでした。どんな曲でも自分のものにして、自分らしく弾きこなす先生の演奏に引き込まれていきま

した。

コンチェルトフェスティバルでの私の演奏は、緊張して、先生のアドバイスが実行できたかどうかさえ分かりませんでした。しかし、多くの方々にはめられ、先生も笑顔を見せてくれました。解散する際に、またあの大きな手で握手をしてくださいました。今度お会いする機会があれば、私も自分の演奏を自分なりの表現で聞かせたい、そう心にちかいました。

